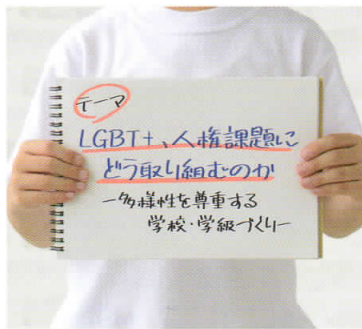
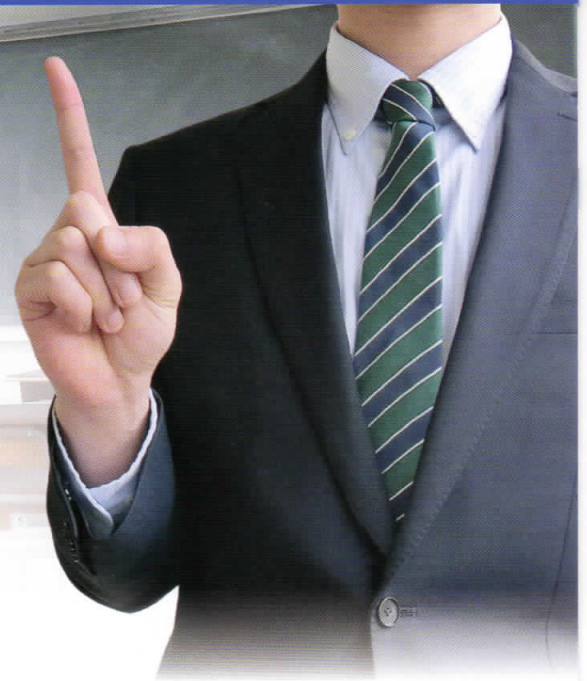


居心地のよい学校・学級とは

多様性を尊重する 学校・学級づくり

－ マイノリティ共感を育むために －



教育の世界は急激に変化しています。新しい学習指導要領によって、「小学校英語」や「道徳」が教科化され、一層教職員の奮闘が求められています。

一方で、いじめ自殺や SNS が起因する問題など、予測できない事態に遭遇することがあります。また、過剰な勤務から、学校でも「働き方改革」が問われており、この中で、教師たちはどこへ向かっていけばいいのでしょうか。

教師がめざすことは、今も昔も変わっていません。それは、**子どもたちの笑顔が満ちあふれる学校・学級づくり**です。そこには、教師と子どもの良好な関係性があります。しかし、今学校では、子どもたちの世界の多様化に苦慮しています。規律や規範のとらえ方、いじめへの対応の難しさ、児童虐待、クレーム対応などで、過去と同じような対応をすれば、深刻な問題になることがあるのです。これまでの発想を変えなければいけないことは分かっていますが、追いついていないのが現状でしょう。つまり、子どもにとっても、教師にとっても、「居心地の悪さ」が、現代の学校の問題かも知れません。一方で、規律がなく、自由気ままの形では、学校教育がうまく機能しません。

では、「**居心地のよい学級**」とはどんなものなのでしょうか。多くの教員が、こうした学級をめざして、日々努力しており、素晴らしい教育実践が、各地で展開されています。しかし、それらは、個々の教員の経験や資質によって実践されているため、教師の個人技や成功体験として語り継がれる傾向が強く、教育現場に広がっていかないのが現状です。そうすると、組織的な対応は難しく、せっかくの教師の技や理念が、今増加している若手教員等に伝承していかないものになると思われます。

このリーフレットは、居心地のよい学級とはどんなものなのか、どう対応すればよいかという点で、これまで行ってきた「**いじめ**」、「**ネット問題**」、「**LGBT**」の**研究(科学研究費助成事業)**から浮かび上がってきた現状と成果を踏まえ、学校現場向けに“提言”としてまとめたものです。



研究の流れと成果の概要

2008年に、ISSBD(国際行動発達学会：ドイツ開催)で企画したシンポジウムにおいて、国内外の研究者に、いじめ問題への教師のあり方について、問題提起を行いました。そこでは、「①教師の知識習得」、「②行動研究や実態調査」、「③教員養成と教員研修」の重要性が示されました。これは、世界も日本も同じ問題意識であり、教師の研修制度もそうした点がポイントであることが明確となりました。

その後、10年間、教師の対応のあり方(最適化)について研究してきましたが、様々な教育課題に対しては、いずれの場合も、教師の関与と指導方略が必要であり、その「最適化(目的に対してもっとも適切な方針・計画をたて、設計を行い、あるいはそうした選択を行うこと)」が欠かせないことが強調されました。

この研究において数多くの助言をいただいたスティーヴン・ラッセル教授(米国)から、「intersectionality(問題や課題の多重性)」の示唆があり、いじめ問題・ネット問題・LGBT等の現代の諸課題は、個別の課題ではなく、**輻輳(ものが集まり、混み合うこと)**している背景があり、総合的に対応することが、教師にとって必要であると示されました。

現代の諸課題に対応するための新たな枠組み (総合的な対応とは)

現代の諸課題に対応するための新たな枠組みとは何でしょうか。仮に、新たな課題に対峙したとき、それに対する知識や経験がなければ、解決に至ることは難しいといえます。つまり、**教師のスキーマ[schema]**(新しい経験をす
る際に、過去の経験に基づいて作られた心理的な枠組みや認知的な構え；大辞林第三版)を獲得・広げておく必要があり、大学・大学院は、その役割を果たすものとして有効だと考えられます。つまり、「**知見と実践の往還**」です。

特に、教師の指導の「最適化」は、①なぜ、そうした課題があるのか、課題の背景は何かを把握、②その解決のための知識やスキルを習得、④適切と思われる方針・計画の立案、⑤実践に向けての設計と選択、⑥実践、⑦検証という流れであり、**教職大学院学修システムが、これにあたります。**

各学校では、こうした手順で、「居心地のよい学校・学級づくり」や、「多様性を尊重する学校・学級づくり」を進めていくことが重要だと考えます。

課題の現状と対応について(性の多様性の視点から)

昨今注目されている「**ダイバーシティ**」は、多様性を尊重する考え方であり、性別や人種の違いだけでなく、年齢、性格、学歴、価値観などの多様性を受け入れることです。つまり、誰しものが生きやすい世界をめざしているのです。

ここでは、2019年1月12日に鳴門教育大学で開催されたシンポジウムの講演(講師：葛西真記子)及び、鼎談(葛西真記子・吉井健治・阪根健二)の中から浮かび上がった視点や論点などを紹介します。

LGBT+ とは?

「LGBT=セクシュアルマイノリティ全体」だと思いませんか。そもそもLGBTは、Lesbian(レズビアン)、Gay(ゲイ)、Bisexual(バイセクシュアル)、Transgender(トランスジェンダー)の、頭文字で表されているものです。しかし、そこに当てはまらない(分けられない)人もいます。そこで、「**LGBTQ**」と表現されることがあります。

この「Q」とは、Queer(クィア)とか Questioning(クエスチョニング)のことです。クィアとはもともと侮辱の意味はありましたが、現在は学術的な用語です。クエスチョニングというのは、まだよく分かっていない、自分のアイデンティティがはっきりしない場合のことです。例えば、性別に違和感があるのか、好きなのは異性よりも同性が多いのか、自分は何だろうかという思いがある人です。**学校現場では、おそらく「クエスチョニング」の児童・生徒が多いものと思われ**ます。そのため先生方が「あなたの性は?同性が好きなの?」とか聞いても、自分では分からないのです。それゆえに悩むのです。そこで、先生としては、「ちょっと悩んでいるのかな」、「少し他の人と違うって思っているのかな」という感じで、温かく捉えていくべきでしょう。

セクシュアルマイノリティは、LGBT だけではないということを示すために、「Q」が加えられましたが、non-binary(ノンバイナリー)といって、男/女という二元論という考え方をしないという人もいます。このような多様性の実態から、「**LGBT+(プラス)**」と表現することとしました。

ここで必要なことは、**Ally(アライ：同盟者、協力者の意)の存在**です。セクシュアルマイノリティに好意的で、彼らの生き方や活動を支援する立場であり、教師はその一員であることが望まれます。(葛西真記子教授の講演から)



性の多様性を認める態度こそポイント

性の多様性を認める態度とは、「男 / 女という性別のあり方や異性愛的な考えの偏りに気づき、多様性を認められる態度」のことです。

性の多様性を認める態度が形成されるきっかけとして、メディアなどでの漠然としたイメージではなく、一人の人間として認識する「**セクシュアルマイノリティの可視化**」, 「**当事者との親密化**」, 「**マイノリティとしての共感**」という要素があり、これらが支援活動につながっていくのです。(下図)

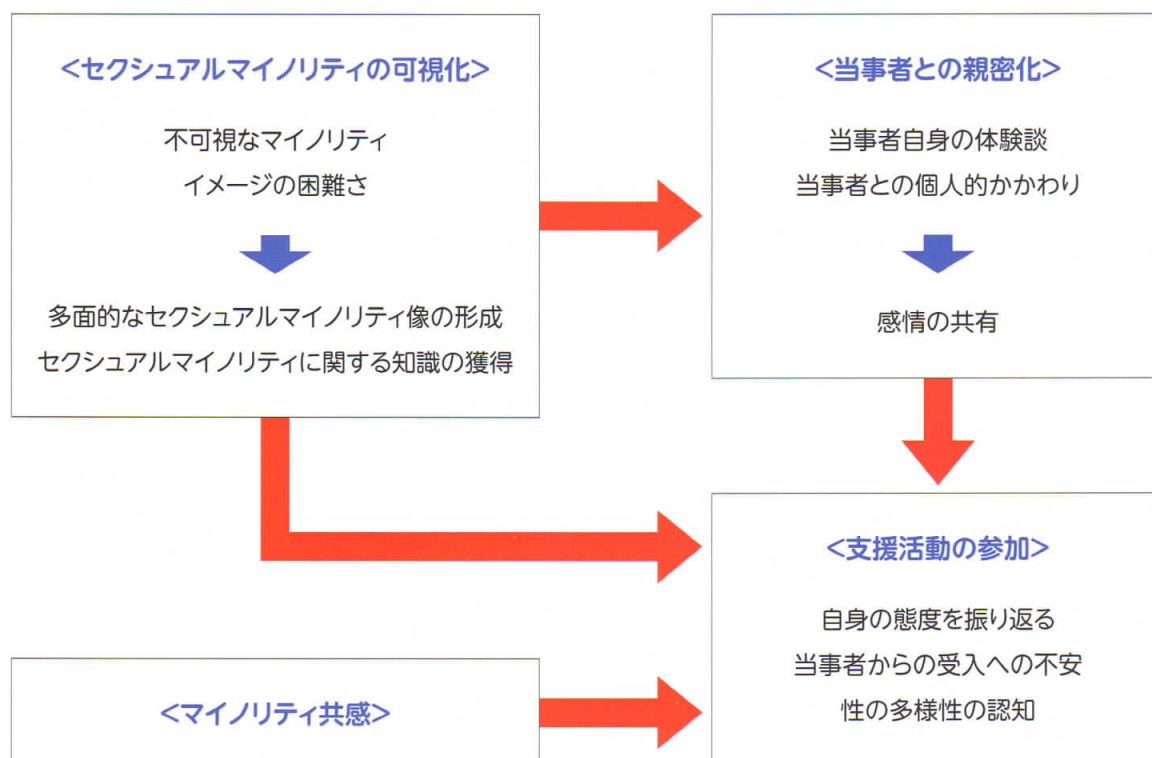


図 性の多様性を認める態度が形成されるまでのプロセス

●セクシュアルマイノリティの可視化 Visualization and Knowledge of LGBT+

セクシュアルマイノリティであるという人との出会いや、知人からのセクシュアルマイノリティであるというカミングアウト、体験談が書かれた書籍や映画を読んだり観たりすることをきっかけに、それぞれの当事者たちがどのような人柄で、どのようなことで悩んでいるのか、一人の人間として当事者と出会う経験である。

●当事者との親密化 Personal and Intimate Relationship with LGBT+

友人や仕事の同僚からセクシュアルマイノリティであるとのカミングアウト、当事者とのインターネット上でのやりとりをきっかけに、相手のことをより知るようになり、共感的に当事者の立場を理解するようになることである。

●マイノリティ共感 Inter-minority Empathy

マイノリティの当事者が、他のマイノリティの当事者の気持ちがわかることである。マイノリティとして自分(うち)に向いていた関心が、他者(そと)に向かうようになり、自身の当事者性だけでなく、他者の当事者性に敏感になり、その人たちの痛みや苦しみを感じることができるようになる。また、ある側面で当事者だった者は他者からの攻撃性や否定的な態度にも敏感であり、マジョリティの者よりも他の当事者の気持ちがわかるということにもつながると考えられる。

(文献) 葛西真記子, 小渡唯奈(2018),

「性の多様性を認める態度」を促進する要因—セクシュアルマジョリティへのインタビュー調査—, 鳴門教育大学研究紀要, 第 33 巻

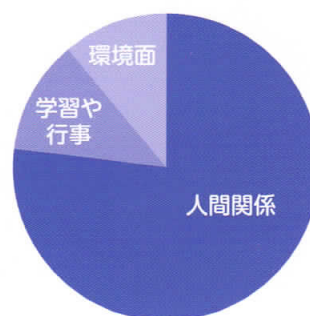
居心地のよい学校・学級とは

「居心地のよさ」とは、ある場所や地位など、そこにいるときの感じ方や気持ちに、**安心や安定的な状態が維持できている**ことだといえます。

では、大学生 120 名に、これまでの学校生活を思い起こしながら、「学校で居心地のよかったときは?」を聞いてみると、以下のような回答でした。



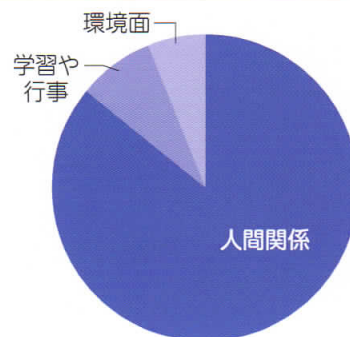
- 1 人間関係 92名(77%)
例：友人と仲良く遊んでいる、先生や友人に承認されている
- 2 学習や行事 15名(12%)
例：授業が楽しい、行事が楽しい、勉強に集中できる
- 3 環境面 13名(11%)
例：静かな図書室、きれいな教室



自由筆記から分類・分析(複数回答)2018年7月30日調査 鳴門教育大学学生 120名対象

一方「居心地の悪いときは?」となると

- 1 人間関係 96名(86%)
例：友人とけんかしている、いじめ、先生に無視されている
- 2 学習や行事 9名(8%)
例：授業が分からない、行事が面倒、勉強に集中できない
- 3 環境面 7名(6%)
例：せまい教室、暑い教室、きたないトイレ



自由筆記から分類・分析(複数回答)2018年7月30日調査 鳴門教育大学学生 120名対象

いずれも「人間関係」が上位であり、これが不登校に発展することがあります。学校に行きたくても行けないという中で、家庭に引きこもるのではなく、行きやすい場所を提供することが必要です。その行きやすい場所というのは、子どもによって違うところがありますから、様々な選択肢を提供することが必要です。

つまり、**大きな器(学校)があり、小さな器(学校内でも学校外でも)が複数ある**という状況がベストだと思います。

多様性がある時代では、子どもだけの思いではなく、保護者からの思いや要求が過剰になることがあります。ここでは、要求(例えば、クレーム)の「背景」を知ることが重要です。**保護者は、自分の子ども時代の思いや感情を、今目の前にいる担任や学校に向けてくる可能性があります。**そうした心理状態を理解しながら、要求を受け入れるとか、拒否するとかいう点にこだわらず、子どもにとって「居場所」とは何かを示すことがポイントです。(吉井健治教授の鼎談発言から)

新たな課題に教師はどう向かえばいいのか

LGBT+当事者のカミングアウトの年齢が徐々に低くなっています。1970年代には、20歳前後であったものが、2000年頃に実施された研究では、**14歳前後**になっています。社会や子どもの行動の変化が急速な中で、子どもたちは新たな出会い方による問題を抱え、おとなが自分の経験からの対処をあてはめにくくなっているという事態といえます。そこで、LGBT+当事者から聞いた意見を紹介します。(抜粋)

幼児期	<ul style="list-style-type: none">● 性への意識はあまりなく、周囲の環境に依拠していた
小学校	<ul style="list-style-type: none">● 意識(違和感)しはじめたのは、小学校中・高学年が多い。● 小学校高学年の「集団宿泊学習」や「修学旅行」が苦痛となった。
中学校 高校	<ul style="list-style-type: none">● この時期が最も難しい。自分の性に対する意識に嫌悪を感じることもあり、周囲を気にすることが多くなる。自殺などを考えることもある。● 進路を考えることによって、あえて自分を閉じ込める。● 一部、カミングアウトをすることがあるが、そう多くはないと思われる。
大学 就職	<ul style="list-style-type: none">● 安定的な生活の中にあっても、再び意識することがある。● カミングアウトをしても、周囲の理解があると、支援する立場に変わる。

こうした経験から、教師たちに以下のアドバイスがありました。(作成者加筆)

- ① **教師の言動は特に大切**。例えば、「好きな異性がいる?」という問いかけを、「好きな人がいる?」という、性別に囚われない形に変えるだけでも、教師の配慮を感じる。
- ② **宿泊学習等での配慮は必要**。ここに苦痛があったという声が多く聞かれる。
- ③ **教室以外に居場所が必要**。ある当事者は、図書館が自分の居場所になったと言う。そこでは、本との出会いだけでなく、選書の配慮などを感じる。
- ④ 当事者にとって、カミングアウトというのは1回したら終わりではなく、新しい人に出会うたびにカミングアウトをするかどうかを考えている。**カミングアウトしても、受け入れてくれるという安心感**があるかどうかである。まさに、**居心地の良さ、居場所づくりこそが大切であり**、教師の重要な役割なのかも知れない。

最後に、全国から数地域の教員441名に質問紙調査(2016年)を行った結果、「『セクシュアルマイノリティ』という言葉の定義を知っているか」は、56.5%であり、半数以上に認知されていることが分かりました。しかし、「性的指向」と「性自認」の違いが分かるかとなると、21.3%であり、理解の中身は途上だといえるでしょう。現在は、教員研修等で理解は深まりつつあるものと思いますが、過去においても「いじめ」の定義に関するズレが、研究者と実践者の間の誤解を生じさせてきたように、異なる言語間だけではなく、同じ言語を使用している人の間でも立場が違えば、解決に向けての協働を阻害することがあるのです。

いじめ問題の課題を再認識しながら、新たな課題に対応すべきでしょう。

本資料は、「LGBTに関する教師の関与と指導方略の最適化について(科学研究費助成事業 基盤研究(C)16K04771 (研究代表者 阪根健二)」によって作成されたものです。

資料作成者及び協力者 阪根健二、戸田有一、葛西真記子、吉井健治、前川宗正